

**反対される光****ヨハネ1:10~18 / 李正雨師**

明けましておめでとうございます。今年も、神様の祝福と恵みが皆様と皆様のご家庭と共にありますように。私たちが新年の挨拶として使っている「明けまして」という言葉には、いろいろな意味があると思います。そして、この挨拶をしたり聞いたりすると、私たちは、いろいろなイメージを浮かべることができると思います。私の場合には、この「明ける」という言葉は、明けてくる夜明けのイメージを思い出させます。光が暗闇を照らすと、見えなかったものが見えるようになる夜明けの光。これが「明ける」という言葉が私に与えるイメージです。だから私は、この新年の挨拶が私たちキリスト教の信仰と似ていると思います。信仰によって、見られなかったものを見ることができるようになり、思いと心が新しくなることが信仰だからです。この信仰の中で、私たちの新しい年が明けました。今年もキリストの中で新しいことを見つけ、霊と肉が新しくなる私と皆様になりますように願います。

今日の福音書が入っているヨハネによる福音書1章では、イエスさまは2つの姿で表現されていますが、一つは「光」で、もう一つは「言」です。「光」はイエスさまの属性、「言」はイエスさま自身として表現されています。イエスさまがこのように表現されたのには、当時の人々の文化であったヘレニズムの影響があったからと言えます。ヘレニズムは、古代ギリシャの代表的な文化でした。古代ギリシャは大きな帝国であったので、属国にヘレニズムの文化を伝えました。この影響によって、当時のギリシャの属国の民は、自分たちもギリシャ人だと思っていた人々が多かったそうです。ところが、時間が経ち、辺境のローマがギリシャを征服しました。しかし、ローマ人は自分たちの文化を作ったり、伝えたりをせず、他の良い文化があれば、それを自分たちの文化に受け入れました。その結果、古代ギリシャの文化であったヘレニズムは、ローマの文化にも大きな影響を及ぼしました。そしてこの影響は、ローマの支配を受けていたイエスさまの時代のユダヤだけでなく、その以後の初代教会にも広がりました。つまり、イエスさまの福音がユダヤの外の人々に伝えられるためには、ヘレニズムを通して伝えられる必要があったということです。

今日の福音書であるヨハネによる福音書は、4番目の福音書として異邦人向けの福音書だと呼ばれています。また、共観福音書と呼ばれるマタイ、マルコ、ルカによる福音書とは、全く違う形式で書かれています。共観福音書は重なっているところも多く、ユダヤ人の伝統的な文化が主となっています。しかし、ヨハネによる福音書は、共観福音書と重なっている内容が少なく、異邦の所に長く生きていてユダヤの伝統がよく分からないユダヤ人、または異邦人が読んでも分かるように書かれています。ですから、マタイやルカによる福音書の書き出しには、イエスさまの系図が書かれています。ヨハネによる福音書の書き出しには、イエスさまを「言」、イエスさまの属性を「光」と表現されているのです。そしてここでの「言」は、ギリシャ語でロゴスです。このロゴスは、単なる「言」ではなく、ギリシャの哲学で神の理性、真理、分別などを示すものとして使われていました。後にこのロゴスは、宗教的に「この世にあるが、この世を超越した神的な精神」という意味で使われました。すなわち、ロゴスは神のことを示すものでした。中国語の聖書には、このロゴスが「道」と翻訳されています。

ヘレニズムの言葉が入っている形式のヨハネによる福音書は、当時の異邦の地に住んでいた人々に、福音を効果的に伝えることができたものだったと思います。そして、おそらく皆さんも、ヨハネによる福音書は他の福音書よりは、イエスさまについて理解しやすいと思います。私たちの教育も、ヘレニズムの影響をたくさん受けているからです。それで、ヨハネによる福音書の書き出しに書かれている光と暗闇、命とこの世などについて詳しくは分からないと思いますが、だいたい理解できると思います。今日の福音書の始まりは、

「言」、ロゴスを認めないこの世について書かれています。10～11節の言葉です。「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」

この言葉が表していることが何なのかは、皆さんもご存知だと思います。この世から認められなかったイエスさまについての言葉です。イエスさまは、神としてこの世を創造されましたが、人々は、この世にいられたイエスさまを認めませんでした。イエスさまがいられたこの世、つまり、ユダヤ人の世界は、イエスさまを神の子として認めなかったというのです。そしてこの認めについての福音書の言葉は、ユダヤ人が大事に思っていた血統につながります。メシアの救いは血統によるものではなく、信仰によるものだということです。皆さんも当時のユダヤ人たちが血統をどれほど大事に思っていたかをよくご存知でしょう。ところで、今日の福音書は、血統は全く必要ないと語っています。12～13節の言葉です。「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」

救いが血統ではなく、受け入れること、つまり信仰によって成し遂げられるというこの言葉は、今、私たちにとっては当然のことばですが、当時は、新しい教えでした。ユダヤ人たちが異邦人との交わりをタブーとし、混血になったサマリア人たちを無視した理由も、救いが血統によるものだと思っていたからです。彼らは、アブラハムの子孫だけに救いを与えられ、次の救いがユダヤ教に改宗した人々に与えられると思いました。ところで、今日の福音書は、救いが血統から出るものではないことを、人の欲から出るものではないことを語っています。救いの順序や特別な恵みがあるとは語りませんでした。イエスさまを受け入れることが救われることであることをヨハネによる福音書の著者、ヨハネの共同体は、語っているのです。そして自分たちの経験を証(あかし)します。14節の言葉です。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

ヨハネの共同体は、言が肉となったと言います。神さまが人間になったという意味です。そしてこれは、私たち人間のためのことでした。私は、神さまはいくらでもご自分の力を使って、人間を導くことができただろうと思います。しかし、そのようにせず、神さまが人間になられたということは、これが私たちにとって最も大きな救いの証拠になるからだと思います。神さまが人間となられ、この世にいられたというのは、逆に考えると、私たち人間も神の国に入ることができるということでしょう。弱くて、時々悪い私たちですが、十分に神さまの国に行くことができるということです。神の子、すなわち言が肉となって、私たちの中にいられたからです。そして、きょうの福音書は、このことを信じている者は皆、神の子になることができると語っています。これが16節が語っている恵みの上の恵みです。血統や肉の欲ではない御恵み。この御恵みのみによって、私たちは救いを受けることができるのです。

しかし、この救いを施す救い主は、この世から反対されました。これは、この世が望んでいるものではなかったからです。世は自分だけのメシアを望み、自分だけの特権を主張しました。自分たちが享受していることを分けようとはせず、自分たちだけが目立つことを願いました。それでこの世は、皆のメシアという神様の御心を受け入れなかったのです。しかし、イエスさまは皆のためにこの世にいられ、私たちは、これを信じています。この反対された信仰が、私たちを導いて神の子になるようにしました。ですから私たちも、この信仰を伝えているのであり、これによって反対されても、この信仰を放すことができないのです。イエスさまは、みんなのために反対される光としてこの世にいられました。この光に従っている人々は、この世で見られないことを見るようになり、イエスさまの中に日ごとに新しくなるのです。この驚くべき御恵みがこの世から反対されるすべての人々に慰めを与えてくださいますように。この慰めが2022年を迎えている皆様とも共にありますように、主の御名によって祈ります。アーメン